

泥の河

第二回監督作品
小栗康平

あのとき少年時代は終わった。いま、痛みの源流へ^{まかのぼ}遡りたい。



日本映画ペンクラブ推薦
優秀映画鑑賞会推薦
日本映画監督協会・新人奨励賞受賞作品

■原作・宮本輝 (筑摩書房刊/角川文庫版「釜川」に伴載)
第十三回太宰治賞受賞作品



田村高廣
藤田弓子
加賀まりこ
朝原靖貴 (子役)
桜井 稔 (子役)
柴田真生子 (子役)
西山嘉孝
初音礼子
八木昌子
芳賀洋子
麻生 亮
殿山泰司
蟹江敬三
芦屋雁之助 (特別出演)

■製作●木村元保
■脚本●重森孝子
■撮影●安藤庄平
■音楽●毛利蔵人
■照明●島田忠昭
■録音●西崎英雄・平井宏侑
■美術●内藤 昭
■編集●小川信夫
■製作補●藤倉 博

木村プロダクション作品
配給/東映セントラルフィルム **TF**

小栗康平第一回監督作品

泥の河



解説

「大地の子守歌」曾根崎心中(監督増村保造)について木村元保(木村プロ)が製作する第三弾。原作は「蜚川」で芥川賞作家となった宮本輝の処女作であり、第十三回太宰治賞受賞作品である。今回が監督第一回である小栗康平は、モノクローム、スタンダード画面という古典的な手法で、「生」のかたちを、今、逆上せずにとらえることの困難さに挑んで、戦後生れの、ある時代の原質を探りあてようとしている。

舞台は戦後の混乱期を経て朝鮮動乱の特殊需要を足場に高度経済成長へと向う、いわばそのとば口にあつた昭和三十一年、大阪安治川河口。物語は、河っぶちの食堂の九歳になる少年と、その対岸にある日つながれた廓舟(るわぶね)の姉弟とのつかの間の交流と別れである。戦争とその戦後ゆえに人生を決めた大人たちの移ろいゆく傷とためらい、そこにつらなる自分の出生と成長。映画は、河の淵にとどまって暮らすことの人間への愛着と、流されゆく絶望を、少年のまなざしによって純化していく。脚本は「俺たちの荒野」監督出目昌伸、「新八先生」(TBS)の重森孝子。撮影は「私が棄てた女」監督浦山桐郎)の安藤庄平(日活)、美術は大映京都のベテラン、内藤昭、録音は松竹退社後、フリーとして小林正樹、大島渚、篠田正浩等の作品を担当し、続ける西崎英雄、編集は東宝の小川信夫。技術陣は、小栗康平がフリー助監督として浦山桐郎等に師事して学んだ、各撮影所の最良のスタッフが結集した。音楽は現代音楽の新鋭、毛利蔵人が映画音楽を初めて手がけている。出演陣では田村高廣が死んだ親父(阪東妻三郎)とそ

物語

まだ焼跡の臭いを残す河っぶちで、食堂を営む家族がある。その一人息子である信雄(九歳)は、ある雨の早朝、橋の上で鉄屑を盗もうとする少年、喜一に出会った。雨に煙る対岸にその日つながれた、みすばらしい宿船の少年である。船の家には銀子(十一歳)という優しい姉と、板壁の向こうで声だけがする姿の見えない母がいた。友達になつたことを父、晋平に話すと、夜はあの船に行つてはいけないという。窓から見える船の家が信雄を魅惑し、不安にする。

夕飯にその姉弟を招いて父母が暖かくもてなした時、喜一が歌をうたった。「戦友」であった。子供たちの交流が深まり始めたある日、見知らぬ一人の男が食堂を訪ねた。終戦直後、晋平が別れたかつての女房の病変の知らせである。不可解な人生の断面が信雄に成長を促していく。楽しみにしていた天神祭りがきた。だが、その祭りのさなか、喜一は握りしめたお金を落としてしまうのである。

スタッフ

- 昭人夫明 一子暁博
- 蔵信 彰慶
- 藤利川 間田卷司倉
- 内毛 小本安八高藤
- 術集 集果録録
- 美音 編音装記 助監製作
- 保輝子 平昭雄 佑
- 元 孝康 庄忠 英宏
- 村本 森栗 藤田 崎井
- 木宮 重小 安島 西平
- 作本 督影 明音
- 製原 脚監 撮照 録

キャスト

- し勇 柳樹一三司助
- か直 慶敬泰之
- た島 隠川東江山雁
- 南小 葉西村 蟹殿 芦
- 子子 亮明 淳郎 子秀
- 昌洋 木賀生 田木 野三 紹
- 八芳 麻松 鈴木 中下 森
- 廣子 子貴 穂子 孝子
- 高弓 弓靖 真嘉 礼
- 村田 賀原 井真 嘉礼
- 田藤 加朝 桜柴 西初

る。しよげきった信雄を慰めようと喜一は、夜、船の家に誘った。泥の河に突き差した竹箒に蟹の巣があつた。喜一はその宝物である蟹にランパの油をつけ火をつけて遊ぶのである。船べりを逃げる蟹を追つた時、信雄は喜一の母の姿を見た。船は廓舟と呼ばれていたたのである。翌日、船の家は岸を離れた。信雄は曳かれていく喜一の船を追い続けて、初めて生きることの悲しみを自らの人生に結びつけたのである。

「泥の河」はちかごろめずらしく感銘ふかく見た映画だ。河岸の食堂の少年と対岸の宿舟の少年との交渉をテーマとして、その両家の哀歎を誠意と愛情をこめて、しかも客観的にえがきあげた。これはつつしみぶかい、だがゆたかな情感にみちたリアリズムである。これは伝統をあたらしく生かした日本的リアリズムだと思ふ。新人監督小栗康平の門出をばくは祝福したい。

■小栗康平監督の「泥の河」は、日本映画に久しく失なわれていた。すぐれた流派の生命の喜びばしい魅えりを思わせます。人々の生活とその感情のデリケートな細部を賞する緻密な描写こそ、日本映画の伝統のもつとも確固たるところでした。この映画、一点一画をゆるがせにしない日常生活描写のういういしさは、見る者の心にゆつたりとしみとおります。

■人類は古くから「へ川」と共に棲んだ。その川と人にカマを据えて、若いすぐれた作家の目は、人間と歴史を見る。その目は、驚いすぐれた作家の目は、人間と歴史を見る。その目は、驚いすぐれた作家の目は、人間と歴史を見る。その目は、驚いすぐれた作家の目は、人間と歴史を見る。

■小栗康平の映画「泥の河」から受ける感動は、私たちが久しく忘れていた種類のものである。それは、静かに持続する。黒白の撮影技術は殊の外秀逸で、また、俳優の演技にも見せかけの偽りは全く無い。ブレッソンの映画と共通する深度を(私は)この映画に感じた。

武満 徹 (作曲家)

5月下旬
ロードショー

TOEI CINEMA CIRCUIT
伊勢丹斜め向い・新宿東映会館2F
新宿映画ホール・1 (351) 3022

特別封切
銀座2丁目・並木通り
銀座並木座 (561) 3034

特別鑑賞券発売中!
1000円
(当日 一般1300円(の処) 学生1100円)

時間	連日	11:00	1:00	3:00	5:00	7:00
時間	連日	11:30	1:25	3:20	5:15	7:10